

オケのお仕事

10月23、24の両日に開かれた大阪フィルハーモニー交響楽団(大フィル)の定期演奏会。チャイコフスキーの交響曲第4番「がフェスティバルホール(大阪市北区)にうねるように響き渡った。憂鬱さ、絶望そして、最後にそれらに打ち勝つ生命力を爽快な力強い演奏で描ききった。

約85人の楽員を前にタクトを振るのは指揮者、井上道義。指揮台に上がり、長身でしなやかな体軀を使ってオーケストラを導いた。今年4月に大フィルの首席指揮者に就任してすぐ咽頭がんの治療で活動を休止して以来、約6カ月ぶりの共演となったが、ブランクを感じさせない両者の親密な関係が見て取れた。

練習は本番3日前からスタートした。

がんの治療後まもないため、しゃべりすぎると声がかすれる井上だったが、よく話し、細かく指示を出していく。チャイコフスキーの交響曲第4番第4楽章、金管楽器の強奏とティンパニの強打の場面。ティンパニ奏者にもっと強く叩いてほしいと「そこは、もう一節はみ出して弾くべし」との気持ちで指示を出した。

譜面台の上にはA5判のミニサイズのスコアが載っていた。普通、指揮者が見ているのはA4判の楽譜。「学生のころケチって安いを買ったんだけど、そのころからの書き込みが多くて、新しくするチャンス逃してしまった」と少し照れくさそ

イメージ紡ぎ一つの音に



「大フィルは昔からオレのやりたいことに反応してくれるオケ」と信じて指揮する井上道義
大阪府西成区の大阪フィルハーモニー会館

指揮者 井上 道義

うに話す。桐朋学園大で齋藤秀雄に学んだときの、ヨーロッパに渡ってチェリビタツケに師事したときのメモが残っている。

この曲はオケにとって演奏機会の多い曲。「スコアを見なくても細かいテヌートの位置まで覚えてるんだけど、たまに楽員さんにここをどう演奏しようか、と相談されたときなんかに見返します」指揮者はコンサート舞台上

で、唯一、音を出さない音楽家。ただ、その指揮者によって、同じ曲でもまったく違った雰囲気

で演奏される。「指揮者は、楽譜から自分が自然だと信じられるものを感じ、選びとって、何十人もいる演奏家を説得し、納得させて一つの方向にもっていく仕事」と話す。練習で細かく指示をして確認をして、その上で本番で伸びやかに表現できるのが理想。

音楽のコトバ

タクト 指揮者が持つ指揮棒のこと。指揮者が手で示すリズムの刻みや音の強弱、表情を大きく見せるための道具。また、一般的に「タクトを振る」という言い回しが、仕切ったり、主導権を握るといった意味で使われることもある。

「イメージメーカーですね。楽譜を読むのはもちろん、音楽以外のことも興味をもって吸収してアイデアを作らないと」井上は今年13日、再び大フィルと共演する。今度は舞台をザ・シンフォニーホール(大阪市北区)に移して、演奏するのはベートーベン交響曲第5番。日本では「運命」で親しまれる1曲を「鶏肉と、野菜と豆腐だけのうまい鍋みたいな曲だ」と独特の比喩をする。シンプルなたたきタタキというリズムと、3度のハーモニー。「シンプル素材だけを組み合わせただけ聴かせてしまう。普通作れないですね」と感嘆する。

その曲の「どこに目をつけるか」は指揮者の仕事。13日、どんな「運命」を聴かせてくれるのだろうか。(安田奈緒美)

行政による補助金カットが話題となる在阪オーケストラ。抱える楽員とスタッフは多く、運営の悩みは大きい。ただ、多くの人が奏でるからこそ多彩な表現が可能になる。魅力を支える人々を紹介したい。(毎月第2土曜日掲載)



ネット上で才能を発掘するコンテストも実施しているクリヤ。優勝者をこのライブの舞台に立たせて「スポットをあてたい」

ブ

神戸生まれのジャズ・ピアニスト、クリヤ・マコトが制作した最新アルバム「ナッシング・バット・ジャズ」を披露するライブを13日、大阪市北区のビルボ

■「京都ラビッシュアンサンブル」
コンサート 11日、京都市左京区の京都コンサートホール小ホールで。同アンサンブルは平成14年に結成した京都市交響楽団のメンバーらで作る室内楽奏団。コンサートではシューベルトの「弦楽四重奏曲第14番『死と乙女』」「八重奏曲」を演奏する。午後7時開演。全席自由3000円。問い合わせは同ホール ☎075・711・3231。

■弦楽トリオが奏でる「ゴルトベルク」 21日、大阪市北区のザ・フェニックスホールで。世界的ピオラ奏者の今井信子が、米マルボロ音楽祭で出会った新鋭のバイオリン奏者、チェロ奏者と共演して、J・S・バッハ/シトコベツキー編のゴルトベルク変奏曲BWV988(弦楽トリオ版)を演奏する。午後7時開演。一般4000円。問い合わせは同ホール ☎06・6363・7999。

アンテナ